

西郷読みの西郷知らずを問う



宮下 亮善

昨年の4月末か、5月はじめの頃だったと思う。朝の7時過ぎ電話が鳴った。電話の主は、赤崎元鹿児島市長であった。

一昨年は、西南之役140年にあたり、『西南之役官軍陸軍恩讐を越えて』の慰霊法楽を、南洲墓地にて行った。西郷隆盛公會孫西郷吉太郎氏と大久保利通公會孫大久保利泰氏を東京よりお招きし、歴史的握手をしていただきました。ついで、昨年は、大久保利通公命日（明治11年5月14日）前の5月6日に、『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』慰霊塔の墓前で大久保利通公玄孫大久保洋子様を招き、

その法楽を行った。

この法楽についての赤崎元鹿児島市長からの電話であった。「和尚、素晴らしい事をされる。実は、高見橋の大久保銅像を建立する時の秘話がある。その事を、和尚に話しておく」との事。「実は、東京の方から、なぜ、鹿児島の人たちは、大久保銅像を立てないのかと、再三の話が、当時の鎌田要鹿児島県知事にあつたそうです。それで、鎌田知事は、当時の鹿児島の地名士を集めて、そのための会合をもたれて、居並ぶ方々に大久保公の銅像を建立しようと考えておりますが、皆様方のご意見を伺いたいと、話を持ちかけられましたが、誰も発言がなく、やむなく、赤崎君、もし、銅像を立てるとすれば、鹿児島市のどこかに建立するのだから、君はどう思うかと問われたとの事。」そこで、赤崎元市長は「はい、大久保公には、鹿児島の人々は、いろいろ

ろとご批判もあります。私も当然その事は存じておりますが、この大久保公の銅像が建立されて、一番喜ぶのは、西郷さーあじやなかんどかいと、ですから、私個人としては建立したいですね」。「ああー先生いい殺し文句ですな」と。小生、思わず涙腺が緩み涙声で聞いておりました。「和尚、この事を、話してきましたくて、電話をしました。」との事。本当に、素晴らしい秘話。まさに、赤崎元市長の遺言となりました。

昭和64年（1979）大久保利通公没後100年を記念し、中村晋也先生の手により、甲突川左岸高見橋のたもとに建立されている。以来、この秘話を機会あることに、お話ししております。ある人が、「今時、珍しくいい話ですね、本当に、西郷さーあなら、そのように思われるでしょう。是非、これからも、多くの人々に話して下さい」と。人を思いや

る心、惻隱の情、今日、忘れかけている『ものあわれ』を、思い知る秘話です。

大久保利泰氏より、電話をいただき東京の霞会館にお出で下さい。との事、ここには、全国から大久保公のファンが参集されておりました。そこで、この秘話を語りました。皆さん感激の面持ち、今日は参加して良かった。帰り際、「和尚さん、ありがとう、本当に素晴らしい話を聞かしていただきました」と、口々に握手を求められて会場を後にされておりました。その中に、数人のグループがあり、その中のある方が「和尚さん、私どもは、福島の郡山から来ました。私たちの住む地域に『大久保神社』があります。毎年、9月1日は、『大久保神社水祭り』を行っております。是非、和尚さん、お出で下さい」と誘われました。『大久保神社がある』不覚にも、その存在をはじめて知りました。あの『安積疎水、安



明治政府初となる国営事業・安積疎水の完成

明治政府初となる国営事業・安積疎水の完成と大久保利通

『積開拓』事業に、多大の貢献をされた大久保公の恩顧に報いるために建立されたのであった。明治の近代国家建設の重責を一身に受け、殖産興業、農業の開拓、士族の授産事業として、自らも取り込もうとしていた矢先の事、その先駆的試みに、国家予算の3分の1を費やして推進し、明治15年に完成した。

江戸時代の昔から、この安積地域は、西に水は流れても、東に水は流れないといわれ、あの、猪苗代湖の水を、この地域に引き込む事が、永年の念願であったといわれていました。その結果、130キロにおよぶ安積疎水となり、8500町歩の原野が水田に変わり、この開拓事業が、現在の郡山市の基礎となったといわれています。まさに、霞会館で声をかけた方が、大久保利通公顕彰会会長鈴木英雄氏であった。昨年の、9月1日、大久保神社水祭りに参列させていただきました。な

んと、129年ぶりに鹿児島からの参列があったとの事、鹿児島島の地元では、『西郷を裏切った大久保は許さん』と、140数年たつても、非難される人々が居ますが、ここでは、神様として、尊敬されている。同じ鹿児島県人として、複雑な思いで参列させていただきました。今年、丁度、創建130年、その記念に『神殿灯籠』を2基（高さ2.4m）を、奉納させていただきました。これで、大久保公や地元安積の方々に面目が、たつたのではないかと内心喜んでおります。この9月1日の『大久保神社水祭り』130年祭に、鹿児島から参加致します。

「大久保利通公は、西郷隆盛、木戸孝允とともに、維新の三傑といわれ、版籍奉還、廢藩置県、その他の改革政治のすべてに関与した。参与・総裁局顧問・内国事務局判事・大蔵卿などを歴任した。

1871年（明治4年）11月欧米派遣全権副使となり大使岩倉具視らと欧米を巡遊してとくに経済制度を視察しその富強の基づくことを知り、1873年（明治6年）5月に帰朝した。同年10月内地の急を唱えて参議となり所謂『征韓論』の決裂により西郷と袂をわかった。

爾来参議兼内務卿として廟堂の勢望を一身に集め、維新草創期の改革を断行した。地租改正事業や家禄公債制度・勸業施設・地方自治制度などに功績をのこした。多くの経済政策のほか地方官会議・府県会開設など、すべて彼の抱く富国強兵への熱烈な念願から出たものであった。

しかしながらその独裁的強力政治は民間政客・不平士族らの嫉視を買い明治11年5月14日紀尾井坂で石川県士族島田一郎らの凶刃に斃れた。『為政清明』が彼の処世訓であ

ったが、その死後には80000円の巨債が残されたという。」(原口虎雄著より引用)

大久保公は国家目標を「殖産興業」による富国政策と定め、戊辰戦争で荒廃した東北の復興と士族授産対策を重視した。1876年(明治9年)、明治天皇東北巡行に先立ちして視察した安積の地で、「わが国の富強の基はこの地に在り」と、上申書を右大臣岩倉具視に送っている。凶刃に斃れるその朝、福島県令山吉盛典の訪問を受けていた大久保公は有名な30年計画(濟世遺言)を語り、安積疎水事業などに細々と注意を与えていたという。戊辰戦争で敵対した旧幕臣さえも「明治唯一の大宰相」と称賛したという。安積疎水事業は東北復興の核心であり、その無念さはいかばかりかと察するにあまりある。

昨年、南洲墓地の恩讐を越えての慰霊塔の墓前で、大久保利通公の慰霊法楽を5月6日

に執り行うとしたら、狂信的西郷崇拝者たちの妨害を受けました。南洲翁墓前で、前代未聞の大音響を流し、鹿児島市当局の許可もななく違法な恣意行動。自己の意に添わないものは排除するというファシヨ的行動に呆れるばかりでありました。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽くし人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。南洲翁『敬天愛人』の教えです。西郷崇拝者がもつとも心掛けねばならない遺訓かと思いますが、実に見苦しく天にも恥じない行動。

『西郷を裏切った大久保は許さぬ』ただこの一言をもって、140数年もの間、恨みを続け未来永劫に恨みを語り継ごうと言うのでしょうか。確かに、西南之役は親兄弟が竹馬の友が、血涙山河を濡らす悲劇的な戦いではありました。『征韓論』で袂をわち敵対した

ことは、返す返すも残念な事であります。現在においても国論を二つにわる国家的政治的懸案がありますし、これからもこのような問題は消える事はないと考えられます。歴史だ、政治だ、経済だといっても、すべては人間のなせる業。その人間は良い心、悪い心を持ち合わせている。これら全てを含めて歴史を刻んでいくわけであれば、どこかで『水に流す』こともまた、人間の叡智という事になるのではないかと思案致します。『西郷を裏切った大久保は許さぬ』それならば、官軍・薩軍の戦いに何ら関係ない人々が、たまたま戦場となったために田や畑を荒らされ家を焼かれ、あまつさへ薩軍の命令に従わなかったために惨殺された無垢の恨みは誰が晴らすのでしょうか。そのために没落した人々もいたことを、それこそ当事者は未来永劫に忘れてはならないという事も言えます。『つらしとて、恨みか

えすな我人に 報い報いて果てしなき世ぞ』
『回向には 我と人とを隔つなよ 看経はよし してもせずとも』日新公の『いろは歌』
今に光るものがあります。

私たちは歴史から何を学ぶというのでしょうか、西郷さんや大久保さんの何を学ぶというのでしょうか。恨みを語り継ぐことを学ぶのでしょうか。『論語読みの論語知らず』とは、すなわち『西郷読みの西郷知らず』『大久保読みの大久保知らず』に通じるのです。『敬天愛人』『為政清明』この教訓こそは、私たちが心して学びその理想社会実現のために尽くす事こそが、先人に報いる事であると思えます。

あらためて、明治維新150年をふりかえる時、その維新の志士たちは何のために戦い、何に命をかけてきたのか、その意志をどのように次の世に語り継ぐのか、後事を託された

者が考えなければならぬ事だと思ふ。

平成から令和へ時代は大きく変わり、この2600有余年万世一系の皇室の存在をどのように受け止めたらいのか、欧米列強の押し寄せる植民地支配に対して、国を挙げての抵抗運動であつたわけで、公武合体か尊王攘夷か国内は対峙し、多くの尊い命が失われた。すなわち、維新の最大の意義は欧米列強の植民地支配に対抗する事と、皇室を護ることにあつたといえます。何故なら、欧米列強の国々は一神教的価値観を有する国々であれば、一つの国に二人の国王の存在は認めず、一つの国に二つの宗教は認めない。当然彼らの信奉する価値観を強いる事はあきらかである。まさに、2000年来争う中東問題がそれを証明している。150年前に列強の支配を許す事になっておれば、皇室は廃絶され元号も無きものになつていたのであろうと思われる。

藤田東湖先生の『正氣の歌』に、『死しては忠義の鬼となり極天皇基を護らん』まさに、天地の有らん限り皇室を護るの氣概を吐露している。西郷南洲翁もその『獄中感有り』に、『朝に恩遇を蒙り夕に焚阮せらる。人世の浮沈は晦明に似たり。縦い光を回らさずとも葵は日に向かう。若し運を開く無くとも意は誠を推さむ。洛陽の知己皆鬼となり。南嶼の俘囚独生を竊む。生死何ぞ疑わん天の附与なるを。願わくば魂魄を留めて皇城を護らん。』たとえ、命は亡くなつても、魂だけはこの世に残し皇室をいつまでも護りゆかんと、捕らわれの身でありながらもその氣概を吐露している。大楠公『七たび生まれて国に報いる』の尊皇の思いに通じるものがある。その生きざまを『楠公の図に題す』として『奇策明籌謀る可からず。正に王事に勤むる是真儒。懐う君が一死七生の語。此の忠魂を抱くもの今在

りや無しや。』楠木正成湊川の戦いにおいて、30万の足利軍にわずか700騎で負けを承知で挑み討ち死にし後醍醐天皇に忠義を尽くしたこれほどの人物が今の世に居るかどうか、南洲翁自身に問うている。

まさに、『正氣時に光りを放す』藤田東湖先生明治の世に居ましますれば、維新の志士たちも、その『正氣の歌』列したであろうことは容易に想像できる。正氣の歌とは、永い国の歴史において、国の栄枯盛衰、危急存亡の秋に必ず『正氣』を持った人物が現れ国難を救ったという歴史を紐解いたもので、維新の志士たちのバイブル的のものであった。

南洲翁『私学校綱領』

一 道同じく義協ふを以て暗に集合す。乃ち、益々その理を研究し、道義においては一身顧みず、必ず踐行すべし。

二 王を尊び、民を憫れむは学問の本旨なり。乃ち、此の理を究め、王事民義に於いては一意難に当り、必ず一同の義をたつべし。

『私学校の職分』

蓋し学校なるもの善士を育する所以なり。

一 郷一国(薩摩)の善士ならず必ず天下(国家)善士たるべきを欲すなり。

南洲翁が後世に期待する心情が託されている。西南之役でその思いは瓦解したとはいえ、その志しを継ぐことこそが、後事を託されたものの成すべき事であり、決して『西郷読み』の西郷知らず』であってはならない。

みずからを『土中の死骨』として、徹底的に蔑み一切の抗弁もせず、城山の露と散ったその心情と、心ならずも西郷を死に追いやった慚愧の念に苛まれ、警護もつけず島田一郎らの凶刃に倒れし『紀尾井坂の変』を思う時、両雄の生死をも超越した絆の深さは到底凡人

の考えのおよばざるところである。西郷がどうの、大久保がどうのと、どれほどの見識と度量があれば批判できるものか、否、批判できるものではない。

『怨を以て怨に報ゆれば怨は止まず 徳を以て怨に報ゆれば怨は即ち尽く』

恨み辛みの世の中に有為の人材は育たない。何と空しいことか。

《歴史REAL『敗者の明治維新』子孫たちが語る西郷隆盛》抜粋

西郷隆太郎（南洲翁玄孫）

くたしかに二人の最後はいろいろありましたが、今は大久保家と西郷家は親族になっていて、実際、大久保家と隆盛系の血が入っている。僕の兄貴分みたいな人もいます。

それと、今年（2017年）の9月23日、隆盛の命日の前日に、西南之役で敵味方に分かれてしまった鹿児島の人々を結び付けよう

と、「西南之役官軍薩軍恩讐を越えて」という慰霊法楽を鹿児島島の南洲墓地でやったんです。慰霊塔を建てて、除幕式で官軍の遺族代表として利通直系、ご当主の大久保利泰さん（大久保利通曾孫）と、父（四代目当主西郷吉太郎氏）が薩軍の遺族代表として、それぞれスピーチし、握手をしました。もちろん、親族ですのうと付き合いはあったのですが、このように表にお二方が出られたのは初めてだったんです。大々的にNHKのニュースになったのですが、まだ一部には遺恨が残っている方もいるでしょうし、ほんとうに悲しい戦いだったけれども西南戦争から140年経ち、慰霊碑を建てたことによって、少なからず英霊たちが仲良く天国で過ごされることができるとなったのではないかなど。とても素晴らしい慰霊法楽でした。く



(天台宗大雄山南泉院住職・
西南之役恩讐を越えての会事務局長)

『西南之役官軍陸軍恩讐を越えて』の慰霊塔前にて、
西郷隆盛曾孫・西郷吉太郎氏（向かって左）、大久保
利通曾孫・大久保利泰氏（同右）。2017年9月23日。